

幼児の体力についての研究(1)

— 4—5歳時の推移と中間報告 —

梶田 政 昭

Studies on the Physical Strength of Infants (1): Its Change from at the Age of Four to Five, and the Interim Report

MASAAKI KAJITA

目 的

子どもの体力について、とやかくいわれるが、文部省の体力白書による、岸本肇氏等の調査^{1),2)}によれば、筋力(背筋力)と、柔軟性(立位体前屈)の低下であり、全体的には向上している、となっている。それが幼児の体力についてはどうなのか、別府市内の幼児の体力はどうなのか、別府大学短期大学部、幼児児童教育研究センターの御力添えにより、市立の保育所、幼稚園の諸先生方の御協力をいただき、11種目に及ぶ体力測定を、初等教育科、幼児体育研究会の学生と共に3年前より行ってきた。

今回は、4歳児から5歳児にかけての、体力の各要素の推移と、全種目について中間報告を試みたい。

体力を機能的にみた場合^{3),4),5),6)}、筋力・敏捷性・柔軟性・持久力・瞬発力・平衡感覚などからなるとされている。そこで今回は、筋力を腕立伏臥・敏捷性を時間往復走・柔軟性を立位体前屈・持久力を腕立支持・瞬発力を垂直とび・平衡感覚を片脚閉眼立ち、と各要素を含んだ種目で、4歳児から5歳児への推移について分析し、若干の考察を試みた。

調査方法

被験児

昭和59年度別府市立保育所に在籍し、昭和

60年度市立幼稚園に進級した幼児。

男児 50名、女児 40名、合計 90名

調査期間

保育所 昭和59年7月23日～8月2日

幼稚園 昭和60年7月16日～7月19日

9月3日～9月5日

測定及び評価方法

1) 立幅とび マットの端に、テープまたはチョークで線を引き、その線に爪先をそろえて立ち、できるだけ遠くへ跳ぶ。踏み切りの爪先から着地した時の踵までを実測した。

2) 上体おこし 膝を直角にまげ、足を少し開いた状態で仰臥し、手を後ろ頭のところで組む、補助者は、被験児の足が動かないように足首をおさえる。この状態で被験児は、肘が膝につく程度上体をおこし再び仰臥する。これをできるだけ速く繰返し、30秒間に何回できるかを測定した。

3) 腕立伏臥 被験児は、うつ伏せになっている子の背中に両膝をのせ、その子に対し直角の位置で腕立伏臥をし、腕の屈伸を2秒に1回の速さで行い、何回できるかを測定した。

4) 時間往復走 床に5mの幅に1mの間隔で平行線を引き、さらに外側の線より50cm外側にそれぞれ平行線を引く(タッチライン)、用意の合図で、外側の線に立ち、笛の合図で向こう側のタッチラインにタッチする。これを15秒間往復

表1 腕立伏臥についての各群の平均とSD

	男 児		女 児		全 体	
	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時
\bar{X}	5.8回	6.4回	3.5回	4.1回	4.7回	5.4回
SD	4.48	7.58	2.68	4.2	3.97	6.41

表3 立位体前屈についての各群の平均とSD

	男 児		女 児		全 体	
	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時
\bar{X}	8.7cm	7.9cm	7.9cm	8.6cm	8.4cm	8.2cm
SD	3.89	5.20	5.32	4.50	4.60	4.92

表5 垂直とびについての各群の平均とSD

	男 児		女 児		全 体	
	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時
\bar{X}	14.5cm	18.8cm	15.9cm	16.9cm	15.1cm	17.9cm
SD	4.13	5.02	5.84	4.41	5.01	4.85

し、何m走ったかを測定する。

5) 立位体前屈 40~50 cmぐらいの高さの台に測定器を置き、測定器台上に立ち、膝を曲げずに測定器の目盛りにそって、両手を揃えて指先をできる限り下へ伸ばし、指先が下方へ何cm伸びたかを測定した。

6) 上体そらし 床にうつ伏せになり、手を後ろで組み足を少し開く、補助者は、被験児の足元に膝をつき、自分の腕が直角になるくらいに体重をかけて、両足首をしっかりとおさえる。測定者は、被験児の肩の所で測定器を用意する。被験児は、上体と顎をしっかりとこし、床面より顎まで何cmかを測定した。

7) 腕立支持 幼児の腰の位置より少し高い机か台を2台用意し、腰の幅より少し広めに机を平行に置く。被験児は、その机の間に立ち両手を左右の机に置き、合図で腕支持し両脚を床からあげる。その状態で何秒間維持できるかを測定した。

8) 開脚体前屈 床に脚を伸ばして座り、脚を

表2 時間往復走についての各群の平均とSD

	男 児		女 児		全 体	
	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時
\bar{X}	26.4m	28.1m	24.5m	26.6m	25.5m	27.4m
SD	3.22	2.43	3.16	2.11	3.33	2.40

表4 腕立支持についての各群の平均とSD

	男 児		女 児		全 体	
	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時
\bar{X}	14°57'	39°7'	17°12'	40°92'	15°7'	40°24'
SD	13.52	23.63	17.65	24.86	15.55	24.19

表6 片脚閉眼立ちについての各群の平均とSD

	男 児		女 児		全 体	
	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時	4歳時	5歳時
\bar{X}	5°16'	5°47'	4°11'	6°31'	4°69'	5°85'
SD	5.69	4.68	2.52	5.43	4.59	5.04

左右に精一杯開き、両手で足首をつかみ上体をできるだけ前屈する。それを、A=胸が床につく・B=額が床につく・C=全然つかない。と3段階に分けて判定した。

9) 長座体前屈^{7),8),9)}床に脚を伸ばして座り、足の腹を測定器にピタッとつけ、測定器の両側面にある目盛りにそって、両手を精一杯伸ばす。立位体前屈を座って行うことになるが、この測定器は市販されていないので、幼児の足より少し大きめの箱を用意し、その箱の両側面に目盛りをつけ、測定器の腹面より両手の指先が、何cm出るかを測定した。

10) 垂直とび 市販のジャンプメーターを用意し、測定器の上に立ち、足元にある細い紐を腰に巻きつけたベルトに結びつける。足元から先の方にある紐の先にあるメジャーをピンと張り、被験児はできるだけ高く跳び上がる。そして何cm高く跳び上がったかを測定した。

11) 片脚閉眼立ち 床の上に直立し、合図で両手を横、片脚で立ち片方の脚を曲げて後ろへあ

げ閉眼する。何秒間その状態が維持できるかを測定した。

結 果

腕立伏臥（筋力）

腕立伏臥の結果を表1に示す。この結果について対応のある t 検定を用いて調べた。その結果、男児においては有意な差はみられなかった ($t=0.63$, $df=49$, $n.s.$)。女児においても有意な差はみられなかった ($t=0.97$, $df=39$, $n.s.$)。また男女合せた全体についても同様に、有意な差はみられなかった ($t=1.02$, $df=89$, $n.s.$)。

時間往復走（敏捷性）

時間往復走の結果を表2に示す。この結果について対応のある t 検定を用いて調べた。その結果男児においては有意な差がみられた ($t=3.52$, $df=48$, $p<.01$)。女児においても有意な差がみられた ($t=3.55$, $df=39$, $p<.01$)。また全体においても有意な差がみられた ($t=5.02$, $df=88$, $p<.001$)。

注) 男児において、人数が他は50人であるのにこの種目は49人となっているのは、5歳の時この種目を実施していない者が1人いたからである。そのためこの種目は49人に合せて調べた。

立位体前屈（柔軟性）

立位体前屈の結果を表3に示す。この結果について、対応のある t 検定を用いて調べた。その結果、男児においては有意な差はみられなかった ($t=-1.34$, $df=49$, $n.s.$)。女児においても有意な差はみられなかった ($t=0.74$, $df=39$, $n.s.$)。また全体においても有意な差はみられなかった ($t=-0.44$, $df=89$, $n.s.$)。

腕立支持（持久力）

腕立支持の結果を表4に示す。この結果について、対応のある t 検定を用いて調べた。その結果、男児においては有意な差がみられた ($t=7.60$, $df=49$, $p<.001$)。女児においても有意な差

がみられた ($t=5.68$, $df=39$, $p<.001$)。また全体においても有意な差がみられた ($t=9.43$, $df=89$, $p<.001$)。

垂直とび（瞬発力）

垂直とびの結果を表5に示す。この結果について対応のある t 検定を用いて調べた。その結果、男児においては有意な差がみられた ($t=4.70$, $df=48$, $p<.001$) が、女児においては有意な差はみられなかった ($t=1.08$, $df=39$, $n.s.$)。また全体においては有意な差がみられた ($t=4.14$, $df=88$, $p<.001$)。

注) 男児において、人数が他は50人であるのにこの種目は49人になっているのは、5歳の時この種目を実施していない者が1人いたからである。そのためこの種目は49人に合せて調べた。

片脚閉眼立ち（平衡感覚）

片脚閉眼立ちの結果を表6に示す。この結果について、対応のある t 検定を用いて調べた。その結果、男児においては有意な差はみられなかった ($t=0.30$, $df=49$, $n.s.$) が、女児においては有意な差がみられた ($t=2.42$, $df=39$, $p<.05$)。また全体においては有意な差はみられなかった ($t=1.57$, $df=89$, $n.s.$)。

体力を機能的にみて、各要素を含んだそれぞれの種目の測定結果をもとに、4歳から5歳への推移について、対応のある t 検定を用いてそれぞれ分析した。

以上のことから、4歳から5歳への体力の推移は敏捷性・持久力・瞬発力における発達のみられるが、筋力・柔軟性・平衡感覚では、発達がさほどみられなかったということがわかる。また男女別にみると、敏捷性・持久力では男女とも発達がみられるが、男児においてはその他に瞬発力でみられるものの、女児の瞬発力ではたいした発達はみられなかった。逆に女児においてはその他に平衡感覚で発達がみられるものの、男児の平衡感覚の発達はあまりみられなかった。

今回の研究に該当する幼児90名の測定結果

表7 4歳児における全種目の測定結果

		立幅とび cm	上体おこ し回	腕立伏臥 回	時間往復 走 m	立位体前 屈 cm	上体そら し cm	腕立支持 秒	開脚体前 屈	長座体前 屈 cm	垂直とび cm	片脚閉眼 立ち 秒	
昭和 59年 度保 育所	男	<i>n</i>	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50	
		ΣX	5423	124	288	1319.5	434.3	1454.5	728'36	A B C 4人 25 21	439	726.1	258'1
		\bar{X}	108.5	2.5	5.8	26.4	8.7	29.1	14'57	A B C 8% 50 42	8.8	14.5	5'16
		<i>SD</i>	14.74	3.94	4.48	3.22	3.89	6.56	13.52	/	4.8	4.13	5.69
女 児	<i>n</i>	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	
		ΣX	3723.5	82	138	980	317.5	1139.5	684'8	A B C 11人 16 13	305.5	634.8	164'36
		\bar{X}	93.1	2.1	3.5	24.5	7.9	28.5	17'12	A B C 27% 40 33	7.63	15.9	4'11
		<i>SD</i>	13.06	2.68	2.68	3.16	5.32	6.08	17.65	/	4.52	5.84	2.52
全 体	<i>n</i>	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	90	
		ΣX	9173.5	206	426	2299.5	751.8	2594	1413'15	A B C 15人 41 34	744	1360.9	422'46
		\bar{X}	101.9	2.3	4.7	25.5	8.4	28.8	15'70	A B C 17% 45 38	8.3	15.1	4'69
		<i>SD</i>	15.6	3.45	3.97	33.3	4.6	6.35	15.55	/	4.74	5.01	4.59

表8 5歳児における全種目の測定結果

		立幅とび cm	上体おこ し回	腕立伏臥 回	時間往復 走 m	立位体前 屈 cm	上体そら し cm	腕立支持 秒	開脚体前 屈	長座体前 屈 cm	垂直とび cm	片脚閉眼 立ち 秒	
昭和 60年 度幼 稚園	男	<i>n</i>	50	50	50	49	50	50	50	50	49	50	
		ΣX	58.61	218	322	1377	393.5	1764	1985'00	A B C 0人 15 35	280	675.2	252'24
		\bar{X}	117.2	4.4	6.4	28.1	7.9	35.3	39'7	A B C 0% 30 70	6.6	18.8	5'47
		<i>SD</i>	22.15	4.56	7.58	2.43	5.2	7.04	23.63	/	5.58	5.02	4.68
女 児	<i>n</i>	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40	
		ΣX	4132.5	129	165	165	345	1400.5	1636'62	A B C 2人 15 23	280	675.2	252'24
		\bar{X}	103.3	3.2	4.1	26.6	8.6	35.0	40'92	A B C 5% 37 58	7.0	16.9	6'31
		<i>SD</i>	12.86	3.74	4.20	2.11	4.50	6.57	24.86	/	6.07	4.41	5.43
全 体	<i>n</i>	90	90	90	89	90	90	90	90	90	89	90	
		ΣX	9993.5	347	487	2442	738.5	3164.5	3621'64	A B C 2人 30 58	611.5	1594.7	526'23
		\bar{X}	111	3.9	5.4	27.4	8.2	35.2	40'24	A B C 2% 33 65	6.8	17.9	5'85
		<i>SD</i>	19.85	4.26	6.41	2.4	4.92	6.83	24.19	/	5.81	4.85	5.04

は、上記6種目の他に5種目を合せたものを表7・表8に示す。

間報告として保育所は表9、幼稚園は表10にそれぞれ示す。

また、過去3年間の全種目の測定結果を、中

表9 別府市立保育園体力測定中間報告

		立幅とび (cm)	上体おこ し(回)	腕立伏臥 (回)	時間往復 走(m)	立位体前 屈(cm)	上体そら し(cm)	腕立支持 (秒)	開脚体前 屈	長座体前 屈(cm)	垂直とび (cm)	片足閉眼 立ち(秒)		
昭和59年度 (昭和59年7・8月実施)	男	n	103	103	103	103	103	103	103	103	103	103		
		ΣX	10863.5	237	576	2647.5	773.7	2949.5	1689°35	$\frac{A}{9人} \frac{B}{39} \frac{C}{55}$	829	1439.4	447°19	
		\bar{X}	105.6	2.3	5.6	25.7	7.5	28.6	16°40	$\frac{A}{9\%} \frac{B}{38} \frac{C}{53}$	8.0	14.0	4°34	
	女	n	78	78	78	78	78	78	78	78	788	78	78	
		ΣX	7161.0	113	267	1882	536	2316	1485°09	$\frac{A}{23人} \frac{B}{32} \frac{C}{23}$	577	1184.7	309°79	
		\bar{X}	91.8	1.4	3.4	24.1	6.9	29.7	19.04	$\frac{A}{29\%} \frac{B}{41} \frac{C}{29}$	7.4	15.2	3°97	
	全 体	n	181	181	181	181	181	181	181	181	181	181	181	
		ΣX	18024.5	350	843	4529.5	1309.7	5265.5	3174°44	$\frac{A}{32人} \frac{B}{71} \frac{C}{78}$	1406	2624.1	756°98	
		\bar{X}	99.6	1.9	4.7	25.0	7.2	29.1	17°54	$\frac{A}{18\%} \frac{B}{38} \frac{C}{43}$	7.8	14.5	4°18	
	SD	15.76	3.26	4.31	3.74	4.46	5.97	17.45	/	4.39	4.93	3.78		
	昭和60年度 (昭和60年7月実施)	男	n	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77	77
			ΣX	7073	41	241	1959.5	370	2235.5	1522°55	$\frac{A}{0人} \frac{B}{20} \frac{C}{57}$	415	999	303°74
\bar{X}			91.9	0.5	3.1	25.4	4.8	29.0	19°77	$\frac{A}{0\%} \frac{B}{26} \frac{C}{74}$	5.4	13.0	3°94	
女		n	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	76	
		ΣX	6597.5	67	135	1881	409	2365	143°81	$\frac{A}{2人} \frac{B}{38} \frac{C}{36}$	509.5	1054.6	375°98	
		\bar{X}	86.5	0.9	1.8	24.8	5.4	31.3	18°47	$\frac{A}{3\%} \frac{B}{50} \frac{C}{47}$	6.7	13.9	4°95	
全 体		n	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	153	
		ΣX	13670.5	108	399	3840.5	779	4601.5	2926°36	$\frac{A}{2人} \frac{B}{58} \frac{C}{93}$	924.5	2053.6	679°72	
		\bar{X}	89.3	0.7	2.6	25.1	5.1	30.1	19°13	$\frac{A}{1\%} \frac{B}{38} \frac{C}{61}$	6.0	13.4	4°44	
SD		18.09	1.83	5.77	3.13	5.84	6.51	23.27	/	4.65	5.23	3.87		
昭和61年度 (昭和61年7月実施)		男	n	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67	67
			ΣX	6596.7	69	158	1616	281	2136	992°83	$\frac{A}{0人} \frac{B}{20} \frac{C}{47}$	292	1008.5	179°37
	\bar{X}		100.0	1.0	2.4	24.5	4.3	31.9	15°04	$\frac{A}{0\%} \frac{B}{30} \frac{C}{70}$	4.4	15.1	2°68	
	女	n	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	66	
		ΣX	6004.1	85	186	1596	506.5	2227.5	1158°43	$\frac{A}{3人} \frac{B}{40} \frac{C}{23}$	556.5	864.7	276°80	
		\bar{X}	91.0	1.3	2.9	24.2	7.8	33.8	17°55	$\frac{A}{4\%} \frac{B}{61} \frac{C}{35}$	8.4	13.1	4°19	
	全 体	n	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	133	
		ΣX	12600.8	154	344	3212	787.5	4363.5	2151°26	$\frac{A}{3人} \frac{B}{60} \frac{C}{70}$	848.5	1873.2	456°17	
		\bar{X}	95.5	1.2	2.6	24.3	6.0	32.8	16°30	$\frac{A}{2\%} \frac{B}{45} \frac{C}{53}$	6.4	14.1	3°43	
	SD	17.21	2.31	4.25	2.72	5.40	5.50	21.72	/	6.05	5.07	2.94		

表10 別府市立幼稚園体力測定中間報告

		立幅とび	上体おこ	腕立伏臥	時間往復	立位体前	上体そら	腕立支持	開脚体前	長座体前	垂直とび	片足閉眼	
		(cm)	し(回)	(回)	走(m)	屈(cm)	し(cm)	(秒)	屈	屈(cm)	(cm)	立ち(秒)	
昭和59年度 (昭和60年2、3月実施)	男	n	464	464	464	464	464	464	464	464	464	463	464
		ΣX	51018.9	2607	3412	13024	1925.5	17086.5	28241.44	$\frac{A}{12} \frac{B}{100} \frac{C}{352}$	2384	8816.3	2327.40
		\bar{X}	110.0	5.6	7.4	28.1	4.1	36.8	60.79	$\frac{A}{3\%} \frac{B}{23} \frac{C}{74}$	5.0	19.0	5.02
	女	n	485	486	486	486	486	486	486	486	486	485	486
		ΣX	48032.3	2337	2769	12988	3216	18293.5	29656.24	$\frac{A}{69} \frac{B}{184} \frac{C}{233}$	3194	8619.7	2864.94
		\bar{X}	99.1	4.8	5.7	26.7	6.6	37.6	60.82	$\frac{A}{14\%} \frac{B}{38} \frac{C}{48}$	6.6	17.8	5.89
	全 体	n	949	950	950	950	950	950	950	950	950	948	950
		ΣX	99051.2	4944	6181	26012	5141.5	35380.0	57897.68	$\frac{A}{81} \frac{B}{291} \frac{C}{578}$	5578	17524.9	5191.34
		\bar{X}	104.4	5.2	6.5	27.4	5.4	37.2	60.61	$\frac{A}{8\%} \frac{B}{31} \frac{C}{61}$	5.9	18.5	5.46
	SD	16.65	4.60	6.79	2.25	5.20	5.71	54.71		4.66	6.35	5.20	

昭和60年度 (昭和60年7、9月実施)	男	n	481	481	481	479	481	481	481	481	481	480	481
		ΣX	55586	1550	2366	13283	3283.0	15663.5	19932.68	$\frac{A}{7} \frac{B}{132} \frac{C}{342}$	2541	8245.1	2688.72
		\bar{X}	115.6	3.2	4.9	27.7	6.8	32.6	41.44	$\frac{A}{2\%} \frac{B}{27} \frac{C}{71}$	5.3	17.2	5.59
	女	n	406	405	405	406	406	405	405	406	406	406	405
		ΣX	42883.5	1153	1618	10689	3106	13473	16086.55	$\frac{A}{16} \frac{B}{194} \frac{C}{196}$	2685.5	6709.6	2867.30
		\bar{X}	104.3	2.8	4.0	26.3	7.7	33.3	39.75	$\frac{A}{4\%} \frac{B}{48} \frac{C}{48}$	6.6	16.5	7.08
	全 体	n	887	886	886	885	887	886	886	887	887	886	886
		ΣX	97924.5	2703	3984	23972	6389.0	29136.5	36029.57	$\frac{A}{23} \frac{B}{326} \frac{C}{538}$	5226.5	15954.7	5556.02
		\bar{X}	110.4	3.1	4.5	27.1	7.2	32.9	40.65	$\frac{A}{3\%} \frac{B}{37} \frac{C}{60}$	5.9	16.9	6.27
	SD	16.57	3.88	4.99	2.51	4.74	7.49	29.40		5.07	4.97	6.35	

昭和61年度 (昭和61年7、9月実施)	男	n	499	499	499	498	499	499	499	499	499	498	499
		ΣX	55537.6	1311	3291	13121.5	3690.5	17043.5	20354.17	$\frac{A}{6} \frac{B}{99} \frac{C}{394}$	2255	9937.9	2293.07
		\bar{X}	111.3	2.6	6.6	26.3	7.4	34.2	40.79	$\frac{A}{1\%} \frac{B}{20} \frac{C}{79}$	4.5	20.0	4.60
	女	n	477	477	477	477	477	477	477	477	477	477	477
		ΣX	47274.7	946	2130	12075	2926	16913.5	18361.99	$\frac{A}{18} \frac{B}{190} \frac{C}{269}$	3148.5	8341.3	2418.81
		\bar{X}	99.1	2.0	4.5	25.3	8.2	35.5	38.49	$\frac{A}{4\%} \frac{B}{40} \frac{C}{56}$	6.6	17.5	5.07
	全 体	n	976	976	976	975	976	976	976	976	976	975	976
		ΣX	102812.3	2257	5421	25196.5	7616.5	33957	38716.16	$\frac{A}{24} \frac{B}{289} \frac{C}{663}$	5403.5	18279.2	4711.88
		\bar{X}	105.3	2.3	5.6	25.8	7.8	34.8	39.67	$\frac{A}{2\%} \frac{B}{30} \frac{C}{68}$	5.5	18.7	4.83
	SD	16.88	3.52	6.73	2.51	4.77	6.04	31.98		5.25	5.49	4.40	

考 察

過去に、何千人かの幼児について体力測定を行うなかで、4歳児と5歳児の比較は、何度か調べてきたが、推移については初めての調査であった。数字のうえからだけでなく、幼児の体育的な指導を行うあらゆる場面で、その体力については、筋力・柔軟性・巧緻性においてかなり欠けていると感じていた。今回の調査でも、岸本肇氏等の調査結果¹⁾(今の子どもたちは、昔と比べると筋力と柔軟性が低下している)と同じように、腕立伏臥(筋力)および立位体前屈(柔軟性)においてその発達がそれぞれみられなかった。特に、4歳児、5歳児のからだの柔軟性は、平均値において4歳児の方がまさっていた。すでにこの年齢においてかたくなり始めているのは確かなことだ。

筋力と柔軟性および平衡感覚での発達はみられなかった。それが低下とはいえないが、この幼児期にその兆しがみえるように思える。このような傾向は、いいかえれば身体を支える、体幹筋肉系の低下と硬化¹⁰⁾につながるものであり、またその原因はひとことでいえば、全身をつかった遊び不足によるものだ。

ま と め

幼児の体力測定は、その日その時の状態で記録にかなりの差があり、その結果がその子の体力のすべてだとはいえない。したがって、それはひとつの目安としてみる必要がある。

今回の調査結果をとおして、幼児の発達を培うといわれる「遊び」が、不足している¹¹⁾ことを感じた。しかし現代社会における現状は、子どもの遊び場の減少¹²⁾・自然環境とのかかわりの不足¹³⁾・車社会¹⁴⁾あるいは・テレビづけ¹⁵⁾・既製のオモチャの膨大な数¹⁶⁾・等々子どものからだをとおしての遊びの機会と場所を、少なくする多くの諸問題は年々ふえるばかりである。だからといって子どもの発達を培う遊びが少なくても良いはずがない。このような現状のなかで、

「どうすればしっかりと遊ばせることができるか」ということは我々指導者に課せられた大きな課題である^{17),18)}。

最後に、この体力測定に御協力下さった、市教育委員会、児童家庭課の諸先生方や、数多くの市立幼稚園、保育所の諸先生方に深く感謝し心より御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 岸本肇 体格と体力の現状を考える 正木健雄(編) からだをみつめる(双書・子どものからだ1) 大修館書店, p66-88 (1981)
- 2) 正木健雄 子どもの体力 大月書店, p33-35 (1983)
- 3) 勝部篤美 幼児体育の理論と実際 杏林書院, p28-29 (1975)
- 4) 植屋春見 体力論 杉山書店, p41-46 (1973)
- 5) 朝比奈一男 体力の考え方 福田邦三(監)・船川幡夫・石河利寛・小野三嗣・松井秀治(編) 日本人の体力(改訂第3版) 杏林書院, p1-15(1917)
- 6) 小野喬(監) 池上スポーツ普及クラブ(編) 体力づくり 文研出版, p21-24 (1975)
- 7) 松田岩男・杉原隆・南貞己・和田尚 幼児の運動能力と居住地区、遊び、幼児の母親の養育態度との関係について 東京教育大学体育学部紀要, 第10巻, p41-49 (1971)
- 8) 前掲書 3), p40-56
- 9) 浅野辰三 幼児の健康・体育 逍遙書院, p144-152 (1977)
- 10) 前掲書 1), p81
- 11) 小野三嗣 健康・体力づくり入門 大修館 p13 (1982)
- 12) 前掲書 1), p240
- 13) 前掲書 1), p238-240
- 14) 前掲書 1), p217
- 15) 前掲書 1), p240-244
- 16) 前掲書 1), p242
- 17) 文部省 子育ての中の基礎体力づくり 第3集 「育ち盛り」第一法規, p128-139
- 18) 前掲書 1), p81